

# 「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室  
Mail：nishikouarigatou@gmail.com

Instagram：nishikouarigatou  
twitter：@nishiko\_arigato  
Hashtag：#ありがとう西高

## 西高の歴史を振り返る

どのようにして西高の基盤が出来上がっていったのか。第3回目は、創立13年目から27年目（昭和の終わり）までを振り返る。グラウンドの拡張、重層体育館の新設など、各種施設の整備が終わり、部活動の活躍や国際交流など「特色ある活動」をみせるようになった「西高の成長期」を追っていく。

### 第3回 「重層」完成、時代は平成へ

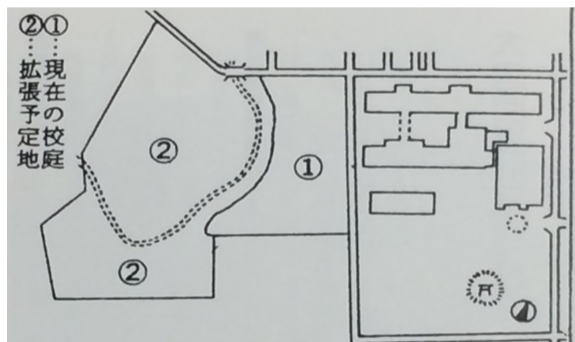
創立から数えて13年目の昭和50（1975）年2月、創立当初からあった木造校舎が解体された。跡地の一部に運動部室棟が新設され、翌年には「古墳横」に柔・剣道場やテニスコート三面が整備される。

この頃から、部活動の活躍が記録に残るようになってくる。昭和51（1976）年に、バドミントン部がインターハイ出場。団体5位に輝いている。当時顧問だった中野伸先生は創立30周年記念誌において「最初の頃は、練習場所の確保ができず、校庭の隅やほかの部活が終了後、また早朝に体育館を使用していました」と施設面の苦勞を語っているが、逆説的に言えば、それから改善が見られているということだろう。また同年には、ワンダーフォーゲル部が関東大会に初出場。2年後の昭和53年には、演劇部が県コンクールで準優勝し、文化部の活躍も見られるようになる。

昭和54年は現在にも続く西高の特色である「国際交流」が始まった年となった。留学生2名をイギリス、フランスなど3か国に派遣。また初の交換留学生の受け入れも始まり、カナダから1名が迎え入れられた。

創立から19年目の昭和55年7月には、学食と合宿所からなる「生徒ホール」が完成。昭和56年度から58年度にかけて、吹奏楽部が3年連続で県コンクールの銀賞に輝く。

現在の西高は、「広大なグラウンド」と「重層体育館」を備え、運動部にとって充実した環境となっている。だが、開校当初のグラウンドはそこまで広くなかった。何度かの拡張工事を経て、昭和59年の拡張で、現在の



校庭拡張予定図（30周年記念誌より・昭和59年）

敷地となる。広いグラウンドで、野球、サッカー、ソフトボール、陸上部が同時展開することができる。

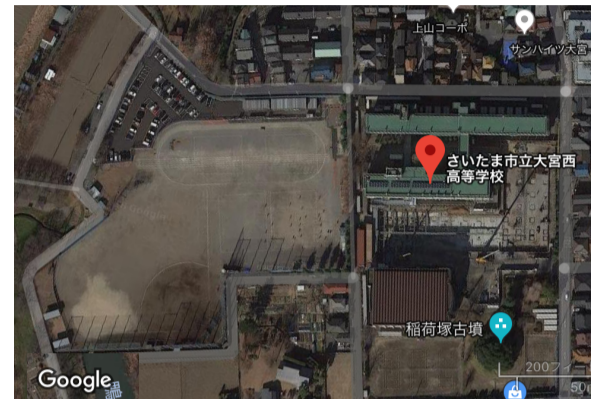
創立25年目の昭和61年、「重層体育館」が完成。剣道、柔道場を備えた複合施設は、校内の部活動や文化祭ステージなどはもちろん、県大会など様々な対外イベントでも活用されることが多くなった。

昭和62年には、生物部が「細胞分裂の環境要因」というテーマの研究発表で、県大会の最優秀賞を受賞。翌年は陸上部がインターハイ出場、軟式テニス部が関東大会に出場するなど、目覚ましい活躍が生まれた。

創立13年目から27年目までの西高は、各種設備の整備が終わり、部活動の活躍が目立つようになる「成長期」の時代であった。

そして時代が平成に変わる頃、創立時より長く西高に勤務していた教員の多くが、定年を迎え西高を去るようになった。入れ替わりで、多くの「新しい先生」が西高に着任している。この「新しい先生」たちこそが、西高を「現在の校風」に変える立役者となった。

次号からは、平成の30年間で西高が「県内有数の人気校」へ駆け上がった軌跡を追う。



北西が駐車場になった現在のグラウンド（グーグルMAPより）

### あの場所は、今 -グラウンド篇-

昨年12月に発行した本紙「第5号」で西高の創立時の歴史を概観した際、現敷地への移転当時の写真を掲載した。その写真を見ると「ある違和感」を覚えることだろう。現在の校舎がある場所に、グラウンドがあるのだ。そして現在グラウンドとして使っている敷地は、田畑として使われていたようであった。

広大なグラウンドは、西高の特徴の一つだろう。入学時、記者にとってもグラウンドの広さは驚きだった。その時は正確な大きさがわからなかったが、体育の持久走の衝撃的な距離によって明らかになった。秋期の持久走の授業でよく使われる、グラウンド外周を経て鴨川沿いへと繰り出す「鴨川コース」は、一周4キロ弱。文化部であった記者にとって「地獄」そのものであった。

放課後は野球部、サッカー部、陸上部、ソフトボール部などそれぞれが同時平行して使用できる広さがあった。そして、期末の球技大会では、ソフトボールとサッカーの試合会場としても利用され、全校生徒が熱狂する場となる。汗をたらしながらプレイする生徒のかけ声と、その何倍の応援の音がグラウンドに響いていた。今となっては良き思い出だ。

現在、新校舎建設に伴い、グラウンドの北西部分は駐車場に転用されている。かつて我々が走った砂地の一部はコンクリートで固められ、また在校生の減少により放課後の活気も弱まっている。来年度以降、新校の新入生がグラウンドの賑わいを再生してくれることを期待したい。（石井）



# 大宮西高伝

## 失望から、ようやく見つけた充実感

戸塚 健一さん（革職人）

大宮駅東口からバスで30分ほど。閑静な住宅街の中に、その工房はある。「CrumsyLife」と屋号の書かれた外壁。横付けされたバイク。そして何よりも、窓の内側からのぞく牛の頭骨はレプリカだろうか。圧倒的な存在感を放っている。

工房の代表は、戸塚健一さん。ここでは、ハンドメイドで革製品を制作しており、アーティストやスポーツ選手からのオーダーも絶えない、知る人ぞ知る存在だ。戸塚さんは、どのような西高生活を送ったのか、お話をうかがった。



西高時代を振り返り、笑顔を見せる戸塚さん。自身の工房にて。

### 仲間と 手にした成績

中学生の頃、戸塚さんは、ある夢を抱いていた。――将来は国内メーカーで、バイクのエンジンを開発したい。そのために、いずれは大学で機械工学を学ぼう。高校でも「ロボコン」のような場で活躍したい。

しかし、自分が進んだ大宮西高には、そもそも環境がない。戸塚さんは入学早々、目標を見失っていた。日々、思い通りにできない窮屈さに「なんでこんなに理不尽なんだろう」と思うこともあった。

現在の戸塚さんは、こう振り返る。「機械工学を学びたいければ、勝手に学ぶこともできたわけです」。それが許される、大宮西高の自由な校風を活かせなかったのは、若さゆえの過ちと苦笑する。燻ぶってばかりいたわけではない。中学時代に経験した軟式テニス部に所属すると、1年生でレギュラーの座を掴む。賞やタイトルを取っ

たことがなかった当時の軟式テニス部に、4部リーグ準優勝の成績をもたらした。3年生になると、県大会ベスト8にも貢献する。「たまたま、中学時代に（軟式テニスで）強かったメンバーが、西高に集まったんですよ」。仲間あつての成績と、笑顔を見せた。

### 希望通りに いかない進路

3年生の頃、戸塚さんは部活動だけでなく、生徒会の書記も務めていた。生徒会長に当選した友人に誘われ、誰もやらないなら引き受けたそうだ。生徒会の運営に関わることで、後輩やOBと向き合う場面が増えてくる。期待以上の充実感があったという。

卒業後の進路は、理系の大学を志望した戸塚さん。やはりバイクのエンジンを開発する夢は捨てきれず、機械工学を学ぶつもりでいた。だが、またも両親から「理系はカネにならない」と反対される。時代はバブル崩壊直後。戸塚さんは、やむなく経済学部へと進路を変えた。  
(次回へ続く)

### 高校進学と 失望感

「単純に家から近かったんです」西高を選んだ理由について、戸塚さんは口を開く。当時の自宅から、自転車で10分ほどだった。実は戸塚さんには、他にいきたい高校があった。その高校に、一度は願書を出したものの取り下げることになる。「確実に進学できる高校へ」という、両親の強い意向のためだった。

親が決めたことは、絶対だと思っていた中学時代の戸塚さん。積極的に行きたいわけではなかったが、大宮西高へ進むことになる。中学3年間、勉強してきたことが無駄になるのかと、失望感もあったという。